コルドバのメスキータ

イスラム教の寺院、モスクを、スペイン語でメスキータという。

コルドバのメスキータが有名である。

アンダルシア地方で最も内陸部にある都市コルドバは、今でこそ人口三十万余の街であるが、十世紀には北アフリカ・ヨーロッパのイスラム国家の中心として栄え、最盛期には人口百万、モスクの数も三百を超えたという。

古代ローマの植民地時代から優に二千年以上、いろんな民族がこの地に住み、栄枯盛衰を繰り返した。

北アフリカからジブラルタル海峡を渡り、イスラム教徒がスペインに侵入してきたのは八世紀前半。

コルドバのメスキータは紀元七八〇年、イスラム教徒以前にこの地を支配していた西ゴート国の教会跡地に建てられた。

内部の柱は西ゴート人特有とされる赤と白のレンガを馬蹄形にしたアーチが二層になっている。天井を高くし、重量を分散させるための知恵である。

イスラムの人たちは異文化に寛容だったのだろうか。

レコンキスタ（国土回復運動）でイスラム勢力はこの地を去り、再びキリスト教徒の街となった。メスキータの中央部分は改装されてカテドラルになる。

完成後、これを見た王は「お前たちは、どこにもないものを壊して、どこにでもあるものを造った」と嘆いたという。

とはいえ、イスラム色は多分に残されている。

パティオと呼ばれる中庭もその一つ。イスラム教徒は礼拝前にこの中庭で体を清めてモスクに入った。今は池はないが、オレンジの樹の中庭はそのまま残っている。

ミナレットと呼ばれる高い塔も残っているが、今は教会の鐘塔になっている。

〈ユダヤ人街〉

メスキータを出るとすぐ近くに旧ユダヤ人街の花の小径という名所がある。

一世紀、ローマ軍によってユダヤ人国家は滅ぼされ、民は世界各地に離散した。ディアスポラである。

その一部はスペインに来た。イスラムの時代は彼らと共存し、なくてはならない存在であった。彼らが有能な民族であることは歴史が証明している。

しかし、キリスト教の時代になると、ユダヤ人追放令が出されて国を追われた。

他の民族と同化しないから嫌われるのか、キリストを殺したので迫害されるのか、余りに有能で金融などの中心を握るので、その国の人たちに嫌われるのか、とにかく流浪の民である。

名前だけが残っているユダヤ人街の花の小径。自分の国を作りたいという長年の希望がイスラエルという国を誕生させた。

しかし、今はパレスチナの人たちを迫害している。複雑な気持ちで小径を歩いた。

メスキータの前で出会ったジプシー風の赤ちゃんを抱いたお母さんの物乞いを忘れられない。

世界史の一部を凝縮した街に、いろいろな人がきょうも生きている。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

メスキータの西ゴート人特有の柱＝大理石の柱は手の脂で黒光りしている

ユダヤ人街の花の小径＝前方が今は鐘塔のミナレット